

気を落とさずに、絶えず祈れ

創世記 32 : 23 - 32

ルカによる福音書 18 : 1 - 8



司祭 ヨハネ 井田 泉

2013年10月20日

聖霊降臨後第22主日

聖ガブリエル教会にて

「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。」ルカ 18:1

イエスさまは、人が悩みを抱えて苦しんでいることをよくご存じでした。イエスの直弟子たちもそうですし、2000年後の弟子であるわたしたちもそうです。

わたしたちは問題のむつかしさ、苦しさに容易に失望してしまいます。時々祈るけれども、心配のほうがまさってしまうことが多い。そういうわたしたちのことをご存じであるイエスが言われます。

「あなたがたは失望するな。勇気を失うな。いつも、どんな時にも祈っていなさい。」

これはわたしたちを悩みの淵から救おうとされるイエスの呼びかけです。この呼びかけに支えられて、わたしたちは祈ります。わたしたちの抱えている困難や苦しみ、願いや葛藤を神さまにはっきり届けて聞いてもらったら、事柄は神さまとしっかり共有したのです。

ここでイエスがなされたのは「やもめと裁判官」のたとえです。やもめ、夫を失った女性は、しばしば力ある者によって苦しめられ、孤立させられ、不利益を強いられて、場合によっては持っているわずかなものまで奪われたりすることがありまし

た。

このたとえの中でやもめの訴えのことをイエスが話されたとき、イエスご自身が出会われたやもめたちの姿が目には浮かび、彼女たちの悲しみや訴えがイエスさまの心の中に響いていたに違いありません。

律法学者たちに食べ物にされているやもめのこと（マルコ 12:40）。

神殿の賽銭箱にレプトン銅貨 2 枚を入れた貧しいやもめのこのこと（マルコ 12:42）。

ひとり息子を失ったやもめのこと（ルカ 7:12）。

この人たちの訴えを、神さまは絶対に放置されることはないのです。

けれども今はしばらくこのたとえから離れて、先ほど朗読された旧約聖書の箇所から、ひとりの祈る人の姿に目を注いでみましょう。創世記第 32 章、はるかな昔の先祖ヤコブの姿です。

旧約聖書・創世記に登場するヤコブは、アブラハムの孫で、イサクとリベカの息子です。ヤコブは双子の弟で、兄はエサウです。若い日に兄エサウから相続権をだまし取り、兄の憎しみを買いしました。ヤコブは母リベカの勧めに従い、母の兄、自分にとっては伯父にあたるラバンのもとに身を寄せ、20 年の間そこで家畜の世話をして過ごしました。

そこでヤコブはラバンの娘、いとこのレアとラケルを妻とし、

たくさんの子どもを授かりました。姉妹の両方を妻としたことから、家庭内での葛藤は激しいものでした。やがてヤコブは家族と家畜の群れを連れてラバンのもとから脱走し、遠い道を旅して故郷の地に戻っていきます。

ヤコブは 20 年という長い年月を経ても、兄エサウが今も自分を憎んでいるのではないか、会えば自分を殺そうとするのではないかと恐れました。

ヤコブは先に使いの者を遣わし、エサウに挨拶させました。使いの者は帰ってきて報告しました。

「兄上のエサウさまのところへ行って参りました。兄上様の方でも、あなたを迎えるため、四百人のお供を連れてこちらへおいでになる途中でございます。」創世記 32:7

400 人！ ヤコブは非常に恐れ、思い悩んだ末、連れてきている人々を、羊、牛、らくだなどと共に二組に分けました。エサウがやって来て、一方の組に攻撃を仕掛けても、残りの組は助かると思ったのです。

ヤコブは叫ぶように祈りました。

「わたしの父アブラハムの神、わたしの父イサクの神、主よ、あなたはわたしにこう言われました。『あなたは生まれ故郷に帰りなさい。わたしはあなたに幸いを与える』と。わたしは、あなたが僕に示してくださったすべての慈しみとまことを受ける

に足りない者です。かつてわたしは、一本の杖を頼りにこのヨルダン川を渡りましたが、今は二組の陣営を持つまでになりました。どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めて来て、わたしをはじめ母も子供も殺すかもしれません。あなたは、かつてこう言われました。『わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂のように数えきれないほど多くする』と。」32:10-13

ヤコブは自分の持ち物の中から兄エサウへの贈り物を選びました。第1の贈り物、第2の贈り物、第3の贈り物と、三重におびただしい贈り物を用意して、順々に兄エサウに届けさせました。

ヤコブは川に至りました。ヤボクの渡しです。ここを渡れば、万一の場合エサウの手から逃れるのは困難です。ヤコブは先に僕たちを渡らせ、持ち物を渡らせ、家族も渡らせました。しかし彼は川の手前に留まっています。渡ることができないのです。兄エサウが恐ろしい。

ヤボクの渡しを前にして渡ることができず、ヤコブは神の救いと祝福を求めて徹夜で神と格闘するほどに祈りました。

こう書いてあります。

「ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、

ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに^{もも}腿の関節がはずれた。『もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから』とその人は言ったが、ヤコブは答えた。『いいえ、祝福して下さるまでは離しません。』『お前の名は何というのか』とその人が尋ね、『ヤコブです』と答えると、その人は言った。『お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。』

『どうか、あなたのお名前を教えてください』とヤコブが尋ねると、『どうして、わたしの名を尋ねるのか』と言って、ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは、『わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている』と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。

ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。」 32:25-32

ヤコブは天使と、もっとはっきり言えば神と格闘したので。こうしてヤコブの祈りは聞かれ、20年ぶりに兄エサウと平和な再会をしました。

諦めてはいけないのです。神の救いと祝福を得るまでは、祈り続ける。毎日毎日神に訴え続けるのです。

イエスは言われます。気落ちしてはいけない。祈る勇気を失ってはいけない。いつも、どんな時にも祈っていなさい。神さまは絶対に放置されない。無視されない。

このように弟子たちに教えられたイエスは、やがてあのヤボクの渡しのヤコブのように、苦しみもだえて祈られました。ゲッセマネです。

ヤコブのようにかつての自分の負い目の故に死の恐怖におびえて祈られたわけではありません。自分の救いのためではなく、人の救いのためです。イエスは死を前にして、ゲッセマネで神と格闘して祈られました。血の汗を流して祈られました。わたしたちを神の国に入れるためです。

ヤコブは祈りの格闘をとおして神の祝福を受け、自分の命を長らえました。しかしイエスは、祈りの格闘をとおしてご自分の死を受け入れ、わたしたちのために神の祝福を獲得してくださいました。

あのやもめと裁判官のたとえを話された最後に、イエスはこう言われました。

「言うておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」ルカ 18:8

人の子とは、イエスご自身のことです。弟子たちのために、天国の門を開いてイエスが再び戻ってこられるとき、「果たして地上に信仰を見いだすだろうか」。

「果たして」と訳された言葉は、*ἄρα* (アラ) というギリシア

語の単語です。これは心配、心の切望、耐えがたい思いをこめて発せられる言葉です。

そのとき、地上に信仰を見出したい。わたしが帰ってきてみんなを迎えるとき、わたしを信じて、諦めずに祈って待っていてくれるあなたがたと出会いたい。

それがイエスの心配であり切望です。

神さまが祈りを聞いておられます。イエスがわたしたちのために祈ってくださいます。イエスが一緒に祈ってくださいます。やがて来られるイエスは、わたしたちのうちに、信仰を、祈りを見出したいと切望しておられます。

今日聞いたイエスさまの言葉を、わたしたちが無にすることがありませんように。

神さま、わたしたちを、失望せずに祈る人にしてください。諦めずに祈り続ける者、いつも祈る者にしてください。イエスさまがご自分の命を献げるまでにわたしたちの救いのために祈ってくださったことを無にすることのないようにしてください。イエスさまがすべてを正しく裁くために再びおいでになるとき、わたしたちが信じて祈ってきた者としてお会いすることができますように。アーメン